

私の知り合いが変人と狂人ばかりな件。byリズベツト

黄金馬鹿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつ、どうして知り合ったかは明確に思い出せないけど、一つだけ言えることがある。私の知り合いは変人と狂人で八割が構成されている。byリズベット

目次

私の知り合いが変人と狂人ばかりな件。 b y リズベット	1
私の店に荒んだ子と鬱な子が来たけどすぐに治った件。 b y リズ ベット	13
ダンジョンのキチガイが短剣買い占めてった件。 b y リズベット	25
ユイちゃん達に頼まれたから昔の事を思い出す件。 b y リズベット	34
キチガイが暴れるかと思ったらニンジャが暴れた件。 b y リズベッ ト	41
キチガイ共がパーリナイツ!!してる件。 b y リズベット	48

私の知り合いが変人と狂人ばつかりな件。byリズベツト

いきなりだが、私ことリズベツト……あ、これ本名じゃないのよ？本名は篠崎里香よ。で、話が少し逸れたけど、私ことリズベツトの交友関係は変だ。

このデスゲームと化したVRMMORPG、ソードアート・オンラインに閉じ込められた私は何人かの親友や戦友と呼べる友達が出来た……の、だけど、その友達共がこう……何と言うか……変人と狂人なの。あ、まともな人も居るわよ？

まず、キリト。彼は私の交友関係の中で数少ない男友達なのだけど……

チリンチリン。

「おっす、リズ」

「あ、キリト。いらっしやい」

と、噂をすれば何とやら。キリト本人がやって来た。

真つ黒なコートに真つ黒なズボンに真つ黒なブーツ。完全に趣味が悪いと私は思うわけよ。

「とりあえず、武器の整備を頼みたい」

そして私は実は鍛冶屋をやっています。いや、案外儲かるのよ、この商売。

数少ない美少女女性プレイヤーにして鍛冶士！しかも腕がいいから依頼殺到！……とまではいかないけども儲かっているのは事実。

……とくにこいつら変人と狂人のおかげでね。

「で、今日は何本？」

え？聞き方おかしい？そんなのこいつの次の台詞聞いたら撤回できるとよ。

「軽目に三十本」

と、キリトがウインドウを操作して目の前に片手用直剣をゴロゴロゴロツと並べる。その数三十本。これでも軽い方だったりする。

「で、今回は何日潜ってたのよ」

「ぎつと三日」

「一日十本か……まあ、あんたにしては軽い方……なのかしら？」

こいつが変人な理由。それは、一々やる規模がソロでやるそれではないのだ。

多分こいつ、潜ってから一睡どころか一回も休んでないわね。目の下の隈ハンパないし。これがマジのキチガイなのかしら。それともただのゲーマー？ 廃人？

「そういえば、今日は妹さんと一緒じゃないの？」

「ああ、あいつは昨日迷宮を抜けて寝に行ったからそろそろ……」

「えっと、タワーシールドタワーシールド……」

あつたあつた。これこれ……って、うっわあ、もう傷だらけ。この間作つたばかりなのに……

え？ なんでタンク用のタワーシールドなんて用意するのかって？

「やつほくりズさん、来たよってことで斬らせて〜」

「はいガード!!」

こうなるから。

ガアンツ!!とかなり大きな音を立ててキリトの妹さん、リーファの少し刀身が反った片手用直剣が私のタワーシールドにぶち当たる。そして遅れてチリンチリンと来店を知らせる音。

このリーファは何と言うか……辻斬りなのだ。もう何かを斬りたいと四六時中思ってるくらいキチってる。圏外だとプレイヤー相手に剣は振らないけど、圏内だと知り合いには何の脈絡もなく斬りかかり、知らない人にもデュエルしようと言いに行く始末。

勿論私も例外ではなく、最初会ったときはデュエルを挑まれ面白半分ですで受けたらなんか星になって、次からは問答無用で斬りにこられて星になった。三回目はバックラー持って会ったら、バックラーごと星になった。四度目からタワーシールドでなんとか防いでいる。受け流しかのスキルってないのかなあ……体術にあるんなら取りたいけど、今更取りに行くのもなあ……

「ちえっ」

「うっさり辻斬り。で、今日の依頼は？」

「これ直して。もう壊れちやいそう」

「どれどれ……うっわあ、耐久値もう一桁じゃない。あつぶないわねえ。これ、一応レアドロなんだから大事にしなさいよ」

「うるさいなあ……分かってるって」

「お母さんみたいとか思ったわね、絶対。先にキリトのがあるから時間かかるわよ」

「え、お兄ちゃんより早くやってよ」

「って言ってるけど？」

「zzzz……」

「……リーファ。先にやったげるからその真っ黒くろすけ帰るときに持って帰って」

「はい」

ちなみに、キリトは帰ってくるると何日かは寝たまま起きないので店で寝られると超厄介。

一回起きるまで放っておいたら三日寝やがった。まあ、一週間潜ったあとだったらしいから仕方ないのかもしれないけど。

今回は丸一日かな。

とりあえず立ったまま寝てる真っ黒くろすけは足を蹴って転ばせて店の隅にシウウウウツ!!超ツエキサイティン!!

さて、遊んでないで仕事仕事……

チリンチリン。

「リズさくん、遊びに来ましたよ」

「きゅる」

「あらシリカにピナ。いらっしやい。仕事しながらでごめんね」

来店を知らせる音が響く。入ってきたのは小学生くらいの身長で髪の毛をツインテールに纏めた少女、シリカ。そして、その使い魔、フェザーリドラのピナ。どちらも小動物らしさが可愛い……のだが、「なら丁度いいです。これ、一本いってみませんか？」

と、言いながら工房まで来てシリカが差し出してきたのは一本の瓶。

なんか白色と言うか透明だ……めっちゃ怪しい。

「……これ、なんの薬？」

「三十二層かそこらで沸くタイムインっていうモンスターが落としたタイムインの粉ってやつとポーシヨンの元を混ぜたやつです」

「へえ、タイムイン……タイムイン……大麻じゃん!!麻薬じゃないの!!」

アイテム名は……大麻のポーシヨン。まんまじゃない!飲むわけがないでしょうがこんなの!!

「プログラミングした茅場晶彦が悪い」

「それを発見して作って人に飲ませようとするアンタも十分悪いわ!!」

……このシリカ、可愛い外見とは裏腹にめっちゃくちや腹黒なよ。しかもこうやって怪しい薬をなんの躊躇もなく渡してくるくらいに悪だ。

しかもシリカは攻略組でやっていけるレベルを持っていながらも中層に留まり、中層のアイドルとして名を馳せている。私からすれば中層のアイドル(笑)なのだけでも……この子はその外見からよくパーティを組んでくれと頼まれるから、パーティを組んで搾取出来るだけしたらすぐにポイ。んでもって次のパーティに入って……を繰り返す。キリト曰く姫プレイつてのをやっている。

しかも相手は搾取されていると気が付かないように立ち回るからタチが悪い。多分、コイツが一番SAO(ソードアート・オンラインの略)を堪能しているに違いない。

多分、このポーシヨンの材料も一人で中層の雑魚をボッコボコにしてとってきた物だろう。

そういえば、この子は一度ハメられかけたらしいが、見事に振り返り討ちにして相手を独房に送ったそう。くわばらくわばら。

「で、シリカ。今日は？」

「この鑑定をしてほしいんです」

と、シリカが一本の短剣を取り出す。

「……搾取したやつ？」

「え？それ以外何かあるとでも？」

……ちなみにこの子、現在は私が作った攻略組の中でもトップクラスの短剣を装備しているので、中層のプレイヤーから搾取した短剣なんて金としか見てないだろう。

「……スノウレオーネ。へえ、中層クラスにしては強い方ね」

「まつ、いいお金に変わりそうですね。でも、そろそろ中層のプレイヤーから搾取するのも飽きてきたし……」

悪女や。悪女がいる。頼むから上層には来ないでくれ。これ以上あんたの表立った評判は聞きたくない。つい本当のあんたを喋ってしまいそうだ。

「まあ、暫くは中層で我慢するか。それじゃアリズさん、また今度」
「またね……」

……あつ、大麻ポーション置いていきやがった。飲めと？飲めつか？

あ、なんかメッセージ飛んできた……ポーション忘れちゃいましたが、飲まないでくださいね？絶対に絶対に飲まないでくださいね？飲んだら感想宜しくお願いします？

フリーでも飲みやしないわよこんな危険物。今度来たら顔面にぶつけてやるわ。整った顔が大変な事になる？別に痣とかそういうのはゲームだから出来ないからいいのよ。

はあ……あと二十本……

え？リーファの剣？もう終わったけど我慢できなくてどっか行つたわよ。帰ってきたらキリトと一緒に渡すつもりよ。

そういえば、リーファだけはなんかあの時茅場晶彦から配布された手鏡覗いてないからアバター姿のままなのよね。まあ、現実でも凄い美少女なのだろうけども。

チリンチリン。

あ、誰か来た。

「すみませくん、すぐ行きま〜す」

「あ、工房にいたのね、リズ」

「あれ？アスナ？」

どうやら来たのはアスナみたい。

「久しぶり、リズ」

「久しぶりね、アスナ」

アスナは私が鍛冶士になって店を開いてから最初の友達。血盟騎士団、英語にするとKnights of bloodっていうギルドの副団長やつてる凄い人。いつもあなたの所の団員に御鼻屑にさせてもらってます。

「今日は何しに？」

「ランベントライトの整備とお弁当の差し入れ」

「ありがと。助かるわ。けど、キリトがいるからランベントライトの整備は後回しになるけどいい？」

「実は今日、この後予定があつて……後日取りに来るからそれまでにお願ひ」

「分かったわ」

副団長は忙しいらしい。多分、今日も予定の合間を縫ってきたんだと思う。

ちなみにアスナは普通に話しているとまともなだけ……圏外に出ると……

『ヒヤッハー!!モンスターなんて雑魚よ!雑魚なのよ!所詮雑魚!!私にそのブツサイクな面見せないでとつとと散ればいいのよ!!オラオラ!目だ!耳だ!鼻だア!!』

的な感じの鬼神になります。いや、これマジなの。一度一緒に狩りに行ったらアスナに狩られかけるといふ謎の事態も起こったし。あんなときは死んだと思つたわね。

「どうしたの、リズ?顔が青いわよ?」

「ち、ちよつとトラウマを思い出しただけよ。し、心配ないわ」

「そう……体は大事にしないとダメよ?」

大事にしなきゃならない体を壊しに来た張本人の言葉がこちら。

「それじゃあね〜」

「バスケットは返しに行くから〜」

……さて、鬼神が居なくなつた所でお仕事お仕事。さつきからちつ

とも進んでないからね。早くアスナの分も仕上げちゃわないと……あ、サンドイッチ美味しい。こりや現実に戻ったらアスナは良妻間違いないしだわ。鬼神に覚醒する機会だって無くなる訳だし。

さて、後で美味しかったとメッセージを送ることにしてさっさとお仕ご……

ドンガラカッシャアアアアンツ!!

……

「ハア……ハア……とつとと渡しなさい!それは私のよ!」

「へっ、やーだよーだ。これはボクのだもんね。欲しけりや奪い取ってみなよ」

「やってやろうじゃないの!!」

「上等!!」

………あゝ、これまためづらしいペアでデュエルしてますこと。えっと、暴徒鎮圧用投擲ピックは……あった、これだ。

「フンツ!!」

「当たらなければどうということはない!」

「そのままそっくりお返しするわ!」

「営業妨害すんなシノンとユウキイ!!」

『耳がア!』

はい、変人二人がまとめて登場。ちなみに、ピックは見事に耳にぶっ刺さりしました。圈内?知らんがな。

「か、片耳が聞こえない……」

「ちよつと何すんのさ!これはボクとシノンのデュエル……」

「アアン!?!人の店のドアぶち破つといてデュエルも何もあるかこのすつとこどっこい!今度は目にやるわよ!?!」

で、ピックが刺さって片耳が聞こえないと呻くのがシノンで抗議してきたのがユウキ。

シノンが変人な理由、それは弓で近接戦闘を挑むということ。

シノンはユニークスキルなのかなんなのか知らないけど、弓を使うのよ。で、それで遠距離戦挑むんじゃないやなくて弓の弦と弓本体で人が他の首を挟んで捻って首を絞めたり耳や目に矢を直接ぶつ刺したりと

やる事がエグい。しかもどうやら矢は無限にあるらしく、一度敵の目を剣山にした事まであった。

「やれるもんならやってみなよ！ここは圈内様だよ？まっ、システム的にも絶対に無……」

「はいぐっさり」

「アアアアアアアアアア!!?」

そんでもって今日にピックが刺さってぶっ転がってるのはユウキ。とりあえず、狂ってる。

人の胸を出会い頭に揉むわ食事は横取りするわ脅して代金チャラにしようとするわ駄目だったらその驚異のVR世界への適合率でデュエル挑むわ。もうやる事なす事正気の沙汰じゃない。

確か……四十二層辺りだったかな？そのボスはこのキチガイ一人によつて倒されたから。ほんと一人でフロアボス倒そうとかキチガイ以外の何者でもない。

人体や生物の急所を的確に突いてくるわ死角をすぐに見つけてくるわホント強いのに性格悪いのがいっちな腹立つ。まあ、ウチの常連だから普通に接してるけど。

「で、ウチのドアを壊したキチガイ共。とつとと直せや」

「悪気は無かったわ。とりあえずお金は払うから」

まあ、シノンが割と常識人だ。発想がクレイジーではあるけども他は常識的だ。

「えっ、めんどいからパス。じゃーにー」

「逃がすわけ無いでしょうが」

「アッー!?!」

再びピックがヒット。何処にとは言わない。まさか詫びの一つも無しに逃げようとするとは思わなかった。ほんとこいつは人生エンジョイしてるわね。

「ふう……やあつとこれが食べられるわ」

と、シノンが取り出したのは……プリン？……ってそれは!!?」

「まさか……黒猫印のプリン!!?」

「そうよ？これを買ったところでこいつにパクられたの」

黒猫印のプリン。これは幻と言われているプリンで、製作者の気まぐれで一桁台しか作られず、それだけしか発売されない超絶品プリン。

なんで黒猫印なのかは分からないけど、私ですら噂に聞いただけで実物を見たことが無かった。

黒猫印のプリンは分かり易いように側面に黒猫と二本の剣が書いてある。

「たまたま下層に行ったら売ってたの。しかも最後の一個」

「へえ〜……運が良かったのね」

「……あげないわよ？」

「流石にそんなレア物を頂戴と言うほどの度胸は無いわよ」

「ならばボクが頂く！」

「この角度で……そおい！」

「壁を跳ね返ってピックが目にイイイイイイイイイイ!!」

ザツクウ!!とピックがユウキのもう片方の目にクリーンヒット。

ほんとと人生エンジヨイしてるわね。

「いただきまーす……うくん、美味しい！ほつぺた落ちちやいそう！」

「何層で売ってたの？」

「確か……十二層ね。ほんとたまたまだったわ。」

「今度からたまに寄ってみようかしら……」

「前が……見えない……」

知るか。自業自得よ。

「ふわああああ……んだよ騒がしい」

「あつ、キリト。目が覚めたの？」

「こんだけうるさかったらな……って原因はユウキか。そりやうるさいわな」

「キリト？キレルよ？」

「黙れ目にピック刺したキチガイ……ん？それは……黒猫印のプリン？」

おつ、流石キリト。レアアイテムを発見する目はキチガイすら凌駕してるわ。

「あげないわよ」

「いや、俺持ってるし」

と、言いながらウィンドウからオブジェクト化したのは……

「黒猫印のプリン!？」

「なんでアンタまで!？」

「なんでって……これの製作者、俺の知り合いでさ。たまに出来たてのくれるんだよ。ほら、こここの二本の剣。これ、俺の二刀流を表してるらしいんだよ」

「……し、知らなかった……」

「そりゃ、一層で知り合ったアスナを除けば、最初に知り合った奴だからな。しかも……まあ、色々とあつて一度別れてからは下層に引きこもってるらしい。このプリンも、俺が売ったらどうだって言ったやつなんだよ」

「……あなたの交友関係は呆れるわ……」

「ならそれはボクが食べる!!」

「やらんわボケ」

「ころしても うばいとる!」

「はいピック五&六本目ー」

「にゃー!!?」

見事にピックが刺さつてフランケンシュタインみたいになった。大丈夫、ダメージはないから。

「で、リズ。依頼の品は?」

「来客が多くてまだ半分」

「そつか。ならこいつを外にやってくるから出来たら……まあ、メツセ飛ばしてくれ」

「えっ、キリト、なんで襟掴むの?」

「だから圏外そとにやってくるから」

「それ死ぬ!死んじやうから!今前が見えてないから!」

「なら後ろを見ろ」

「そんな事してみる!外に出た瞬間切り刻……」

「トドメの七本目」

「アッー!!?」

またぶつ刺さった。何処に、とは言わない。

「それじゃ、私も帰るわ。お騒がせしたわね。修理は私の方から払つとくわ」

「ユウキに払わせりやいいのよ」

「それもそうね。ほらユウキ、右手出しなさい」

「ちよつ、それはキチガイのやるこ……」

「キチガイはあんただ。ついでに罰金は払えつて事で八本目」

「これ以上やられると流石に使つてないのにガバガ……アッー!!?」

「はい回収。それじゃ、リズ。明日には直つてると思うから」

「今度はお客さんとして来なさいね」

……さあて、お仕事お仕事。

ふう、今日も営業終わり。なあんか、今日は知人が沢山来た騒がい日だったわね。

まあ、S A Oが終わるまでの付き合いだし不満とかは特に無いけどね。

チリンチリン。

あら?今日はもう店の札もCLOSEにしたのに……

あ、鈴だけは何故か無事だったわ。だから普通に来店の時は音が鳴るわ。

「やあ、リズベツトくん」

「あつ、ヒースクリフ」

閉店時間が終わったのにやって来たのはヒースクリフ……本名、茅場晶彦。

なんで知ってるかって?たまたま店の裏で嘆いているのを聞いてたら本名ポロツと言っちゃってるの発見したの。そしたらアイテム一つあげるから誰にも言うなって言われたからそれを呑んでる訳。

ちなみに、本ゲームのラスボスだったりする。

「今日はどうしたの？またラーメン屋発見したの？」

「いや、何者かがここで暴れたと聞いてな」

「ああ、ユウキの事。それなら片付いたわよ。けど、あんたから貰った『圏内でも刺せるピック』は十本近く使っちゃったわ」

あの圏内を無視して刺さったピックはこのヒースクリフからチート……じゃなくて、GM権限で貰った物なんだけど、数に限りがあるのよね。

「そうだったか。なら、補充しよう」

と、ヒースクリフは『左手』を振ってウィンドウを出し、何回かスクロールしタップすると、ピックをオブジェクト化して私に渡した。

「ん。あんがと」

「リズベットくん。君に一つ折り入って話があるんだ」

「えっ？私に？」

「そうだ。何と言えればいいか……少し拗ねてしまった子……AIがいてね。君にその子達の世話を頼みたい」

「AI？」

「AIと言っても、そこら辺のプログラムではない。人と同じように感情を持ち、言葉を操る特別なAIだ」

「まあいいけど……」

「感謝する。今度君の元に行くよう、私が指示をしておく」

「分かったわ。それじゃあ、もう店じまいだから」

「ああ。今度、ラーメン屋を発見したらまた来よう」

「ほんとラーメン好きね……それじゃあ、またのご来店を」

ヒースクリフはチリンチリンと鈴を鳴らして去っていった。

……さて、明日の準備が終わったら、とっとと寝ますかね

明日もいい日になりますようにっつと。

私の店に荒んだ子と鬱な子が来たけどすぐに治った件。byリズベツト

さてさて、今日もお仕事お仕事。鍛冶士である私の朝はいつも早い。

店の商品がちゃんと並んでるか、耐久値が減ってる物がないか確認して、私自身、どこも異常がないか鏡で確認して……よし、今日もバツチリ！

「それじゃあ、今日もリズベツト武具店、かいてく……ん………」

……あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！店を開店しようとして表のプレートをCLOSEからOPENに変えようとしたらドアの横の壁に女の子が二人、寄りかかってぐっすり寝ていたわ……な、何が起こっ（略）

「……はっ！ポルナレフ状態になってる場合じゃない！ほら、あんた達起きなさい！宿か家で寝ないと危険よ!？」

二人の体を揺さぶると、二人はすぐに起きてくれた。

圏内であつても全損決着デュエルを寝ている内に申し込まれたら為すすべもなく死んじゃうからね……よかったよかった。

「あれ……？わたし……？」

「ふあああ………」

えっと、黒髪の子と紫色の髪の子？これまたすっごい色に染めたものね……あつ、髪の色を染めるで思い出したけど、私のこのピンクの髪の色、キリトに寝ている内に染められたのよね……しかもその後「淫ピwwwwww」って言って逃げやがったし。あのキチガイめ……今思い出しただけでもむかつ腹たってきた……

けど、アスナやシノンからは普通に似合うって言われるしシリカからはお世辞なしで普通にいいって言われた。なんか複雑。

「あの……？あなたは？」

「ん？ああ、私はリズベツト。この店の主よ」

私の名前を聞いた途端、黒髪の子は何かを思い出したかのように隣

で寝ている紫髪の子をさらに揺すって覚醒させた。

「……えっと、あんた達は？」

「その……ここだと話にくいのですが……茅場晶彦と言えば、分かるでしょうか？」

茅場？ヒースクリフが何で……あつ、そういえばAIの子が何人かここに來るって言ってたわね。もしかして、この子達が？

に、してはAIなんかには……いや、あのキチガイならこんな人間味しかないAIを作りかねん。

「OK、分かったわ。まず入りなさい。」

二人を中に招く。あ、プレートはまだCLOSEのままだ。

さて、とりあえず……私の部屋でいいわね。そこに二人を入れてつと。

「さて、私の名前は知っているとおりリズベット。あなた達はあの茅場晶彦が作ったAIなのよね？」

「は、はい……私はMHC P……『メンタルヘルスケアプログラム』0001、コードネーム、ユイです。」

「め、メンタル……なんだって？」

「メンタルヘルスケアプログラムです。えっと……プレイヤーの方々の心のケアが仕事なんです……その……一部の方が明らかに常人とは可笑しい思考回路で動いてたのでケアしようとして尽く失敗して……もう自壊しようかなと思ったらゲームマスターの茅場晶彦からリズベットさんって人と暮らせてって命令されて……」

「あ……大体分かったわ」

大体誰のせいかは分かった。知り合いのキチガイ共のせいだ。熱い被害をこの子達は受けてるわ。

「こっちのストレアもそんな感じですよ」

「あはは……鬱だ死のう」

「なんかユイちゃんより深刻なのですがそれは……」

「叩けば治ります」

スパアッ!!といい音がストレアと呼ばれた子の頭から響く。人の頭は楽器じゃないのよ? つか、この子達よく見たら目が死んでる

わ。なんかメンタルヘルスケアプログラムを私がメンタルヘルスケアする感じになりそうなんだけど。

ユイちゃんはストレスで荒んでるだけで、ストレアも一時的な鬱病だと信じたい。

「はあ……私達って仕事出来ないからもう用済みなのかなあ……だつたら自壊させてくれればいいのに。」

「そ、そんな訳……無いといいなあ……」

「おうっふ……重症だこれ」

ヒースクリフエ……ちゃんと説明くらいしてあげなさいよ……

「……多分、せつかくそんなに人間味を出して作ったんだからせめて人並みの幸せは味わって欲しいって思ったのよ。」

『そうだといいなあ……』

はい無理です。私には無理ですヒースクリフさん。

「……ああもう！あんたら見てるところこっちまで鬱になるわ!!とりあえず、ユイとストレアは店番手伝いなさい!!」

『……え?』

「返事は!」

『は、はい!』

まあ、労働力が増えたと思ったらしいのよ。さて、今日からリズベツト武具店は美少女二人と美幼女一人でやっていくわよ!!

「いらっしやいませ!リズベツト武具店へようこそです!今日はなんの用事でしようか?」

「ああ、両手剣が欲しくて……店主は今日はいないのか?」

「リズベツトさんなら工房で商品を作ってます。オーダーメイドも出来ますよ?」

そんな声が表の方から聞こえてくる。いや、荒んだユイちゃんと鬱なストレアが来てから既に一週間。

ユイちゃんはお客さんと触れ合ってる内に自然と荒んだのは

治った。んでもってストレアは……

「ただいま、リズ」

「あ、ストレア。お帰りなさい」

「いや、今日も疲れたよ。はいこれ、素材」

「おお、ホントに一人でやってきたの？」

「リズの武器と防具のおかげだよ」

まあ、そりゃあキリトとリーファに協力してもらって作った最高級品だもの。その両手剣、フェイルノートとその防具は。

その下に着てる服もオーダーメイド品だし、まさにストレアの装備は今のところ全SAOプレイヤーが涎を垂らして欲しがるほど！

なんでストレアにこんないい装備をさせてるかって言うと、ストレアに装備してもらってパーティを組んだり一人で狩りに行って貰うことでウチの評判をアップし、客を呼び込むため！しかもその効果は今現在も現れている！いや、ストレアが戦闘できるのがほんと有り難いわ

「それじゃ、フェイルノートと防具の整備するから脱いで」

「わかった」

ストレアが装備を解除し、オブジェクト化して渡してくる。うわっ、耐久値めっちゃ削れてる。接戦だったのね……

「リズさん、オーダーメイドです」

「あつ、はいはい。そんなじゃ、ユイちゃんはしばらくストレアと遊んでいいわよ」

「わーい！行こう、ストレア！」

「おっけ」

いや、ストレアも変わった……いや、戻ったって言った方がいいわね。

ストレアもユイちゃんが元に戻ってくのを見て、自然に鬱も無くなったわ。本人の性格が脳天気つてのもあるんだろうけど。

さて、お客様から要望聞かないと。

「ども、店主のリズベツトです。お客さん、オーダーメイドの剣の依頼ですか？」

「ああ。あの紫の子みたいな両手剣を頼みたい」

あ、そうそう。ユイちゃんとストレアが来てから変わった事が何個かあるわ。

まず、両手剣を使う人が来る事が多くなったわね。ストレアにはこの両手剣はリズベツト武器店のリズベツトのオーダーメイドだと聞かれたら言ってもらってるから、そのおかげね。しかも見慣れない美少女プレイヤーだから興味本位で話しかけてくる人もいるみたいだし。

そんなもって、ウチは防具の取り扱いも始めたのよ。まさか鍛冶で防具まで作れるとは思わなかったわ。金属製限定だけど。

だから、ストレアの防具も金属製で結構重いらしいわ。私は筋力値足りなくて装備できなかったわ。あの子、何レベルなのかしら？

「素材は持ち込みで？」

「持ち込み以外も出来るのか？作ってもらおう契約だけして素材は後で集めてくるつもりだったのだが。」

「腕のいい看板娘がいますから。素材も結構あるんですよ。でも、高くなりますよ？」

「分かった。で、どんな素材がある？」

「ちよつと待っててください。リスト持ってきてきますので」

えつと、リストを書いた紙が……あつたあつた。えつと、これにさつき持ってきてもらった素材も書き加えて……よし、完成。

「この中からなら御自由に。ただ、素材によって金額は変わります」

「なるほど、希少な素材であればあるほど高くつくのか」

「そりゃあ勿論。二つの素材を組み合わせた剣というのも作れますが、その場合失敗する可能性が高まります。持ち込みの素材でなければ、失敗した場合、完成品ほどではないですがコルを頂きます」

文字通りストレアが命懸けで取ってきた素材で失敗してお金はいいですなんて言えるほど人間できてないのよ、私は。

「そうか……金さえ払えばこちらは命を危険に晒してまで素材を取ってこなくてもいい訳か」

「はい。持ち込んでもらえばそちらの自己責任という形になりますの

で、コルを頂くことはありません。失敗しても仕方ないという精神で注文をして頂きますよう、申し上げております」

「そのくらい分かっている。失敗しても鍛冶士に責任はないからな。そうだな……なら、これとこれで頼めるか？」

「二種類の物になりますが、よろしいでしょうか？」

「ああ。金には結構余裕があるのでな」

「この素材となると……お値段はこれくらいですね」

私が提示したお金は……まあ、プレイヤーハウスが二軒くらい買えるわね。

いや、この人知ってか知らないでか、めっちゃレアリティ高い素材で注文してきたのよ？しかもこれを落とすモンスター自体湧きにくい上にすばしっこい、さらに強いわなかなか落ちないわって感じの素材。もう一個は中ボスクラスのやつが10%くらいで落とすやつ。売ればかなりの値段になるような素材ね。

「……高すぎないか？」

「この素材のレアリティをご存知で？」

「いや、見慣れない素材だったからな。そんなにレアリティ高いのか？」

「はい。こちらは……」

ちなみに、この素材だが……ストレアさん、何したのか分かんないけど、この間大量に持ってきたのよね。

いや、すばしっこくて大変だったよ。あ、こっちは普通だった。って言うって。

チートとかはヒースクリフに封じられてるからマジで狩ってきたのだから驚きだ。

「……と、なります。」

「……なるほど、あいつはそんな素材を落とすのか……」

「いかがなさいましょう？」

「それは成功するのかわ？」

「試した事もないので存じかねますね」

うん。ストレアの血と汗の結晶で実験なんてやれるわけないから

ね。ありがとー、カーンカーン、ごめーん、失敗したからまたとつてきてーとか言えないわ。そんな事したらマジもんのクズよ、私。

「……いや、構わない。頼めるか?」

「では、こちらへ」

「工房に入ってもいいの?」

「作る瞬間を見ずに待って、弱い装備ができてふざけるなど言われても困りますので。」

「……確かに、鍛冶の時は素材を炉にくべたらキャンセル出来ないからな。」

プレイヤーの人は納得すると私についてきた

さて、素材はく……あつたあつた。これだこれ

で、これで作る武器を両手剣に設定して、素材を炉へ……あつぽーい……というの冗談で、ちゃんと炉に入れる。そんなもつて暫く待つて、完成したインゴットを引っ張り出して、我が相棒で叩く!

「あ、ここからはもう見なくても結構ですよ」

「分かった。あつちで待っている」

カーンカーンカーンといい音が響く。うん、いい感触。これはちやんとした両手剣が出来るわね。

ひたすらインゴットを打つこと十分弱。インゴットが急に光出して形を変える。

よっしゃ、成功!!

そんなもつて出来たのは……うん、いい両手剣。性能は……まあ、攻略組の中でやっていけるくらいね。あんだだけレアな素材使ったんだし当たり前ね。

「出来ましたよ」

「おお、出来たか」

あ、お客さん、店で売ってる両手剣を見ていた。そのままサブウエポンとして買ってもいいのよ?。

「これがその両手剣です」

「これは……すごいいい両手剣だな」

あつたりまえよ!なんてつたつて、このリズベットが作ったんだか

ら!!

「これはあの値段でも足りないくらいだな……ありがとう、いい買い物だった」

「いえいえ、こちらこそいい取り引きでした」

トレード画面を出して指定したコルと両手剣をトレード完了!よし、こんだけあれば何ヶ月かは何もしなくても暮らせるわね。

「強化の時などはまた来る」

「これからも御贔屓に。リズベット武具店をよろしくお願いします!」

お客さんは満足した顔でその場で両手剣を装備すると店から出ていった。

いや、ああいう満足した顔を見れるから、鍛冶士って辞められないわ。

さて、店に並べる商品を作るとしますかね〜……

チリンチリン。

あ、またお客さ……

「ヘルプ!リズヘルプ!!マジ助けて!!ほんとマジ助けて!!」

「ぶちまけられてえかキリトオ!!」

……うっわあ、これはキリトが鬼神と化したアスナに追っかけられてるわね。

街中でもアスナが鬼神になってるって事はよっほどの事したのね……

「なによキリ……ト……」

なんかアスナの髪の色が水色になってる件。しかもめっちゃ似合ってる。

「ちよつと似合うんじゃないの? って思って寝てる内に染めたらブチギレてさ!!ほんと助けてくれ!」

「リズ?アンタもキリトの味方をするつもり?」

「いや、別に染めた髪を元に戻せばいいだけじゃ……」

「助けてくれ!とつとと助けるよ淫。パイ!!」

「アスナ、これって偶然手に入れた圏内でも刺さる投擲用ピツクなの

よ。十本あげるわ」

「あら、ありがとうリズ」

「ちよつ、それこの前ユウキにぶつ刺してたやつだよな!? おい何で渡してんだよ淫ピ!!」

「黙れよ真つ黒くろすけ」

ちよつとカチンときたからキリトの耳にピックをぶん投げる。

「耳につ!!?」

見事にヒット。ざまあみやがれ真つ黒くろすけ。

「これでお仕置きだキリトオ!!」

「ひいい!? 覚えてろよ淫ピイ!!」

走って逃げてく真つ黒くろすけとそれを追いかける鬼神アスナ。

でもさ、知ってる? あの鬼神つてSAOプレイヤーの中で情報屋のアルゴとかの極振り除くと最速なのよ?

『ギイアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

『ピヤツハアアアアアアア!! 汚物は消毒だアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

……明日、生きてるか確認しよ。

「リズ、戻ったよ」

「リズさん、ただいま戻りました」

「あ、お帰り」

おっと、ユイちゃんとストレアが帰ってきたわね。

……あれ? その手に持つてる袋の中って……

「これ? これはラグーラビットのお肉だよ?」

「ちよつと安全な層のフィールドで散歩してたら見つけたんです!」

「ラグーラビット!? あのS級食材の!」

マジ!? ユイちゃんとストレアって強運じゃない!!

もう幸運の女神でいいわ、この子達。

「リズって料理スキル持ってたよね?」

「一応、カンスト一歩手前よ?」

ちなみに、アスナはカンスト済み。

え? 私が料理するのが意外? よく考えなさい。一年以上一人で生

きてきたのよ？そりゃあ自炊だつてするわよ。そうしたら自然と料理スキルも上がる訳。

「ならこれでパーティーしようよ！」

「いいわね！今日は結構いい収入があったから高級食材大量に使って豪華なパーティーするわよ！」

『おー!!』

ちなみに、買い物に行く時に真っ黒くろすけがマジでモザイクかかった状態で放置されてたわ。

……SAOって過度な表現にはちゃんとモザイクかかるのね……逆にどんなになつてるか気になるわ……そんなでもって道端に血に濡れたピツクが落ちてたのも気のせいなはず。

いや、ラグーラビツトは美味しかったわ。もう二度と食べられないわね、あんな肉。

ユイちゃんとストレアも食べたなら満足して一緒に寝ちゃったし。ほんと姉妹みたいね、あの子達は。

そんなでもって私は店の商品とかを並べてる。もう夜だから来る人もいないしね。ちゃんとプレートもCLOSEだし。

チリンチリン。

あらら？

「やあ、リズベツトくん」

「ヒースクリフ？」

ヒースクリフが来た。こんなに短い期間に来るなんてほんと珍しい。

「ユイとストレアは元気にしてるかい？」

「あ、あの二人の事を聞きに来たのね。心配ないわ。最初こそ荒んだり鬱だったけど、今は治ったわ」

「そうか、君の元に送って正解だった。キチガイの所に送ったらキチガイになつて帰つてきそうじゃね……」

「キチガイは真っ白な布を一瞬で染め上げるからね……」
主に自分色に。

「そうそう、ここに来るあいだにモザイクのかかったプレイヤーを見かけたよ。一応つけた機能なんだが、本当に使われるとは思わなかった」

「それ、キリト。犯人はアスナ」

「……彼女を副団長にしたのは今でも後悔している。」

「でしようね。後悔してなかったらそれはそれでキチガイよ。」

「まあ、ユイとストレアが元気になったならよかった」

「ええ、本当に」

「それと、彼女達は本来、SAOがクリアされると消去される予定だった」

へえ……クリアされると消去ねえ……

「はあ!?消去!?聞いてないわよそんなこと!?!どうやってたら消去されずに済むの!?!」

「落ち着きたまえ。予定だっただ。過去形だ」

過去形……?じゃあ!

「彼女達はクリアされた後は君のナーヴギアのローカルメモリに保存されるようにしておいた。他のVRMMORPGのゲーム……SAOと基幹が同じゲームなら尚更なのだが、そこに君がログインした時、彼女達は君の力となるだろう」

よかった……あの子達が消去されないようになって。

「彼女達は私の娘のようなものだ。私はこのゲームがクリアしたら『ザ・シード』をとある人物に託すつもりだ。もしもその種が開花したら……例えば君がVRMMOを忌み嫌い、二度とやる事が無くなったとしても、いずれ、会えるようになるだろう」

「そう……よかった。このゲームをクリアしても、ユイちゃん達にはまた会えるのね」

「ああ。君がVRMMO……いや、VR世界を忌み嫌わなければすぐに会える。そして、君が生きてる内にVR技術が進化したら、現実で会うことができるのも時間の問題だ」

「え？なんで？」

「今でも映像を投影する機械やARマーカー等があるだろう。それにVR技術が組み合わされば、VR世界の物を投影する事だって出来るだろう。そこに彼女達を組み込めば、彼女達は現実世界にだって住むことができる。私の作ったナーヴギアはその発展を促すための物に過ぎない」

「へえ……」

「予言だと言ってもいい。あと半世紀以内には、VR技術はより進歩する。アニメ等で見える空中に投影するディスプレイだつて実現されるや」

「おお、それは男の子が聞いたら盛り上がりそうね」

「数十年後に盛り上がる少年達が見られるだろうな。君にもザ・シードは渡すつもりだ。もし、開花されないようだったら、君が然るべき人に渡すといい。愚痴を聞いてもらったりした礼だ」

「えっ、私にもくれるの？」

「使い方は自由だ。開花させるも、捨てるのもな」

ヒースクリフは怒涛の説明を終えると背を向けた。

「今度は客として来よう。」

「あいよ。最高の出来で仕上げてあげるわ」

「楽しみにしている。しかし、彼女達を預けた借りをまだ返しきれてないな。何かあったら私に相談したまえ。相談事なら三度ほど、狩りなら一度は付き合おう」

「ほんとう？じゃあその時は扱き使つてあげるわ」

ヒースクリフは小さく笑うと、チリンチリンと音をたてて店から出ていった。

……色々と義理堅いつていうか、真面目なのね。あの天才は。

さて、明日もお仕事頑張りますか!!

ダンジョンのキチガイが短剣買い占めてった件。 b
yリズベット

はい今日もリズベット武具店開店!!

「それじゃあユイちゃん、店番よろしくね。ストレアも行ってらっしゃい。死ぬんじゃないわよ」

「はい分かりました!」

「リズの武器と防具に身を包んだ私に死角なんてないよ!行つてきまゝす。」

「さて、私も作りますか」

最近売れ行きもいいから結構数揃えないと駄目なのよね

あの真つ黒くろすけも定期的に剣を大量購入するから沢山作らなきゃ。

チリンチリン。

あら?まだ開店数分後なのに。ストレアが忘れ物したのかしら?

まあ、それならユイちゃんに任せておけばいいか。それじゃあ私もお仕事お仕事。

「リズさん。お客さんです」

「えっ?お客さん?」

何ともまあ……店の前で張つてた様子もなかったし……偶然かな?

「はいはい、今行きますよ。ユイちゃん、こっちで素材の整理頼んでいい?」

「はい、分かりました!」

いや、ほんとユイちゃんはいいい子やで

私もリアルで娘を持つことになったらユイちゃんかストレアみたいな子に育てよう。そうしよう。

それにしてもほんと、あの子見てると、何と言うか……母性がふつふつと湧いてくるわ。ユイちゃんマジ私の娘。

おっと、とつととお客さんの相手しないと。

「あつ、来た来た。久しぶり、リズ。」

「は!?ファイリア!!?」

「ってファイリア来た!?マジ!?めっずらしい!!」

「何カ月ぶりよファイリア!!」

「ぎつと二、三ヶ月?はいこれダンジョン直送品」

と、オブジェクト化して渡してきたのは……ラグーラビットの肉、一ダース!!?あ、でもファイリアからしたらこれでも少ないくらいか……「いや、昨日の真夜中にダンジョンを二、三ヶ月ぶりに抜け出してきたらやっぱり新しい層が開放されてたね」

「あんたくらいよ……二、三ヶ月もダンジョンに籠もれるのは……」

「そう?休憩ゾーンで十分置きに起きておけば死ぬ事なんてないよ」

「あなたに関しては最早攻略組や上層プレイヤーは手を出してはいけないっていう暗黙の了承すらあるのよ?別に寝てても殺される事なんてないわよ。」

「そう?」

「そうそう、この子はファイリア。自称、トレジャーハンター。攻略組や上層プレイヤーからはダンジョンのキチガイと言われている。」

その理由は、この子、なんと月単位でダンジョンか迷宮に籠って狩りや隠し宝箱を見つけてるのだ。

だから、この子が圏内に来るのはかなり珍しいし、S級食材も腐るほど持っている。

そして、何故この子を襲ってはいけないという暗黙の了承が出来るかという点、この子はトンでもなく幸運の女神に好かれてるらしく、しかもついてくる者ほぼ拒まず、ファイリアが要らないアイテムは全部他のプレイヤーに譲ってくれるため、殺してアイテム得るよりも、ついていった方が経験値稼げるしアイテム譲ってもらえるし、自分のゲットしたアイテムに関しては何も言わないので、殺さずに一緒にについていった方が効率がいいのだ。

しかも、何時間も潜って一体出たらいいくらいのモンスターもポンポン湧いてくるのでこれはもう殺さないでついていった方がいいと暗黙の了承が生まれたのだった。

ちなみにこの暗黙の了承、なんと笑う棺桶ラフィンコフィンですら守っているのだ。理由は勿論、フィリアを殺せばおこぼれを狙っていた攻略組、上層プレイヤーがレイド単位で襲ってくるからだ。ラフコフが壊滅するまで。

一度フィリアを殺そうとしたラフコフメンバーが居たらしいが、フィリアが運良くそこで覚醒、さらにたまたまそこに攻略組が通りがかり、ラフコフメンバーは返り討ち、さらに攻略組の人達が次やったらレイド単位でお前ら襲うぞと言ったらしい。

本当にこの子については。

「で、ここには顔見せに來ただけ？」

「いや、違うよ？ちよつとこれを買収取って欲しくてさ」

と、フィリアが取り出したのは……弓!?!

「これさ、なんか装備不可なんだよ。要らないからついてきてたプレイヤーの人達に装備してみても誰も装備できなくてさ。結局私が貰ったんだけど、これじゃあ宝の持ち腐れだって思ってたさ」

「そりやそうよ。これ、ユニークスキルの専用武器だもの」

「えっ!?!これユニークスキル無いと装備できないの!?!」

「ええ。ビーストテイマーの子にも装備させようとした事があるんだけど、出来なかつたしね。シノンって覚えてる？その子が弓のユニークスキル持ちだからその子に買わせるわ」

「いや、タダでいいよ。知り合いだし、なんか、狩り続けてたらコルが一兆超えちゃってさ」

「ブツ!?!ひ、一兆!?!」

そ、そんなにお金あつたらなんでも買えちゃうじゃない!!

「なんだか私だけ最高金額でお金が入ってきてさ。そろそろ一層に籠ってる人達に1000コルずつくらいあげようかなって思ってる。」

「それは止めときなさい。何時かタカられるわよ」

あ、でもこの子のことだし何とも問題なさそう。でも、それやると本当に調子に乗る奴出てくるから止めた方がいいわね。

その内調子に乗った馬鹿が攻略組や上層プレイヤーや中層プレイ

ヤーは俺達に金を寄付する義務があるとか言い出しそう。同じプレイヤーだから財産は共有すべきだとかなんとか適当なこと理由にして。

まあ、そんな事言われてもこちとら命懸けで稼いでんだしお前らも命懸けで稼げやで終わるんだけどね。

「それじゃあ、私は食料と水買い込んでくるから。あと、その棚の短剣全部頂戴」

「うおっ、それやられると辛いんだけど、まあ何時もの事だしね。全部でこっただけよ」

料金を書いた紙を渡す。

「安いね、流石リズ。はい」

いや、別に安くないんですがそれは。平均的だよ、平均的。性能から見ればね。

「よつと。」

短剣を抱えてフィリアの前に差し出す。フィリアも何の確認もせず短剣をストレージに入れてお金を払う。うん、ピツタリ。

「それじゃあね。また数ヶ月後に来るから」

「あんま心配かけるんじゃないわよ」

フィリアが手を振ってリズベツト武具店から出ていった。あのキチガイがこの先ここに来る事はあるのだろうか？

先にゲームクリアされそうだなあ……

さて、ユイちゃんに店番変わって私は短剣作らないと。置いてあつたやつ全部買われちゃったしね。

チリンチリン。

あつ、ヤバツ、お客さん来た。

「リズ〜？いる〜？」

「あれ、シノン？」

と、思ったらシノンだった。いや、お客さんっちゃあお客さんだけど、気の知れる人だしね。それに、シノンは今短剣を使わないし。

「短剣ない？適当なのでいいから」

「うげっ……ごめん、さつきフィリアが来て全部買い占めちゃった」

シノン私の言葉を聞くと、あく……と納得したような声をあげた。

フィリアは武器を使い捨て同然で使っていくから大量にいるのよね。魔剣クラスとかはちゃんとメンテしてるらしいけど。

「でも、なんで？シノンには弓があるじゃない。」

確かに短剣もたまに使うけど、シノンは基本的に弓（CQC混じりの近接戦）だから要らない筈なのに。

「そのね……ちよつと無理をさせたらこうなっちゃって」

と、シノンが弓をオブジェクト化して見せてくる。

うっわあ……これは……

「真ん中からポツキリと……さらに弦も切れてるし……」

耐久度尽きちゃったのね……

「まさか弓が作れるなんて思ってたから……でも短剣もないのなら困ったわね……」

確かにね……ならちよつちやと短剣を作って……って、そうだ！

「じゃあ、これあげるわ。」

さつきフィリアから貰った弓をオブジェクト化してシノンに渡す。

「えっ？なんで？」

シノンは手に取り重さとか振り回しやすさとかを調べているだから弓はそんな使い方しないってば……

「フィリアがね、使えないからシノンに渡してって置いていったのよ。」

「うっそ……あ、でもフィリアなら有り得るわね。幾ら払えばいい？」
「タダでいいってさ。でも、それちゃんとメンテしなさいよ？もう壊れても変えはないからね」

「分かってる。昨日はちよつとボスが相手だったから酷使しちゃっただけ」

「へえ、ボス？」

「ええ。黒いキチガイと辻斬りと病人（笑）と鬼神と一緒にね。なんか90層クラスのボスモンスターが一層に新たに出来たダンジョンに出てきてね。ちよつとそれを狩ってたの」

「うつわあ……よく死ななかつたわね」

「え？HP0って幻じゃないの？」

「そう言える時点でアンタらはキチガイだ」

ちなみに、病人(笑)とはユウキの事だ。なんか現実だとエイズ患ってるらしいけど……うん、あいつが死ぬのなんて想像できないわ。何気にあいつ、運はいい方……いや、産まれてくる時にエイズにかかった時点で相当運は悪いけど、ここでは何故かいい方だから死ぬ間際に治療法確定したりして。

……なんかフラグ建った気がする。

「さて、この弓の性能は………ブツフウ!?」

「え?どうした……ファツ!!」

あの……キリトのエリユシデータ並の性能持つてるんですがそれは。

「……まあ、フィリアだし」

「フィリアだしね」

その一言で納得できるあら不思議。

その内スナイパーライフルとか見つけてきそう。いや、見つけても使える人いないか。

「いや、いい買い物したわ。」

「買い物っていうか取り引き?」

「ま、そうとも言うわね」

シノンには戦い方以外は常人だからね。数少ない(人格が)まともな知り合いよ。

チリンチリン。

ってまたお客さん?

「やあ、リズベツトさん」

「あ、ディアベル!!めつずらしい!!」

「ははは、聖龍連合の方が一息ついたから武器と盾のメンテを頼みに来たんだ。」

「あ、ついでに鎧もメンテするわよ?最近始めたの」
「なら頼もうかな」

「へえ、ディアベルが出てくるなんて珍しいわね。今頃モグラに転生してるかと思った。」

「もうモグラと大差ない生活してるのは事実だけどね」

こいつはディアベル。聖龍連合の団長をしている凄い奴。

一層で死にかけたって聞いたけどキチガイに助けられたらしいわ。こいつはちゃんとした常識人よ。私の数少ない常識人の知り合いでもある。

ヒースクリフのチートユニークスキル、神聖剣とまではいかないけど、盾と剣を使った戦い方が上手いのよね。さらに人を惹き付ける力もある。女性プレイヤーからの人気も高いらしいわ。

「リズさん、素材の整理終わりました〜……ってあれ、まだお客さんいましたか?」

「あ、ユイちゃん。じゃあ、暫く仕事ないからこの人達と話してて?」

「はい。」

「リズ?この子は?」

「この子はユイちゃん。まあ……なんやかんやあつて引き取った子なの。ストレアって子もこの子と一緒に引き取ったの。」

「へえ……まあ、深くは聞かないよ」

「さんきゅ。そんじゃ、メンテしてくるから鎧脱いで」

ディアベルが鎧を装備から外しオブジェクト化する。ちゃんとその下には服着てるから問題無し。

この剣と盾は私のオーダーメイド品なのよね。でも、一般的には秘密。じゃないと聖龍連合のやつらが俺のも作れと押しかけてくるから。まあ、一度本当にあつたし……血盟騎士団で。そんじゃ、工房に持ってってカーンカーンカーンと。

あの時はアスナが黙らせて裏でヒースクリフがメモリー消去してくれたから助かった。まさか血盟騎士団専属の鍛冶屋になれとか言われるとは本当に予想外だったわ

でも、今は腕がいい鍛冶屋として記憶されてるから血盟騎士団からも結構お客が来ていたり。

まあ、ランベントライトのような魔剣クラスの武器を作れる鍛冶屋

だったら誰でも欲しがるのは当たり前よ。素材があれば、だけで。さてきて、そんな事思ってる間にメンテ完了。でも表面に傷もあるわね……こんなんじゃないやダメよね。ちゃんとそこも治さないと。そんな訳でカーンカーンカーン。

で、直ったところでワックスかけて……完成！

どうよこの輝き！まさに新品同様!!え？見えない？そんな事は私の管轄外よ!!

「ほら出来たわよ……って何してるのよ？」

『はっ!?』

「飴美味しいです」

シノンとディアベルがユイちゃんに飴やらお菓子やら与えてた件。

いや、分かるわよ？ユイちゃん可愛いし。母性や父性駆り立てられるし。

なんか、シノンとディアベル、最早孫を可愛がるおばあちゃんとおじいちゃんみたいな顔してたわよ。

「ほらディアベル」

「ああ、ありがとう……おお！新品同様ピツカピカだ！」

「もっちゃん！私がメンテしたのよ？その程度サービス内よ」

「やはり、持つものは気の置ける仲間と友人と鍛冶士だな」

「鍛冶士だけはSAOに限るけどね。」

はははと笑う私達。ユイちゃんは飴を舐めるのに夢中。

「何味なの？」

「外道神父の麻婆豆腐味」

「……辛いのが好きなのね」

なによ外道神父の麻婆豆腐って。ヒースクリフは何を考えて作ったのよ。

馬鹿と天才は紙一重とか言うけど、あいつは馬鹿寄りの天才ね。いや、変態か。変態に技術力と知識持たせた結果がこれね。

「それじゃ、私はまたレベル上げに出かけてくるわ」

「俺もそろそろ帰らないとヤバイな」

「そう。じゃ、またのご来店をお待ちしております」

チリンチリンと音をたてて二人は店から出ていった。

「さて、ユイちゃん。店番よろしくね。私は短剣作ってるから」

「はい！頑張ってください！」

さて、この後も頑張ってお仕事お仕事！

ユイちゃん達に頼まれたから昔の事を思い出す件。
by リズベット

「え？私がSAOに来た時の事が知りたい？」

ベッドに入っつていざ寝ようと思つてユイちゃんをいつも通り抱き枕にしたその日、ユイちゃんは突然そんなことを言い出した。

「はい。わたし達はSAOが始まってから暫く経つた時に目覚めました。なので、知りたいんです」

「私も知りたいかな」

隣のベッドで既に寝ていたと思つたストレアがこの話に乗つてきた。
た。

「ふうん……まっ、いいわよ。さて、何から話そうかしらね……」

ソードアート・オンラインが始まつたのは一年と少し前。

たまたまVR世界へと入るためのゲーム機、ナーヴギアとSAOを買えた私はなんの疑いもなくSAOの世界へと飛び込んだ。

「すごい……本当にゲームの中なんだ……」

当時の私はそんな事を呟いていたのを覚えている。

で、その時運が良かったのが、なんかよく見る勇者顔をした黒髪の男が……

「おい、そこのお前。これやるよ」

「え？うわっ!？」

と、言つて私に片手棍を何十本も押し付けてきたのだ。当時は迷惑だつて思つたけど、それ全部が五層辺りまで全然余裕で戦える物だつたのよ。

多分、βテスターの人がアイテムを何かしらの方法である程度引き継いだんだろうけど、気前のいい人だったわね。

まあ、手鏡のせいで顔が変わつてるからもう会つても分かんないん

だけどね。私も昔漫画で見た美人キャラを再現した顔にしてたからあっちも分かんないんだろうけど。

で、私は本当は片手剣かレイピアを使うつもりだったけど折角貰ったものだしって訳で片手棍を使っていざフィールドへ……って思ったら強制転移でデスゲームになったとかうんたらかんたら。

まあ、その後は私は一人、宿に籠ったわね。そりゃあ、死にたくないもの。死なないって言う確証がないから出たくなかった。え？意外だって？

そりゃあ、私は当時、花も恥じらう女子高生よ？殺し合いとかしたことも無いのにデスゲームに巻き込まれたらそうなるって。

ごほん。それで、一ヶ月後に第一層が無犠牲で攻略されたって聞いて、もしかしたら第一層でも死ぬ事なんて無いんじゃないかな……って思ってたパーティメンバーを第二層で探したの。もしかしたら一層でのレベル上げに付き合ってくれる人がいるかもって思ってたね。

それは……うん、正解でもあったし失敗でもあったわね……

一年と少し前。

「誰か……パーティ組んでくださーい……」

リズベツトは第二層の街でパーティを組んでくれる人を探していた。

初期に配布された1000コルは既に使い切り、明日の食料すらまかならない状態。もちろんそんなリズに装備を整える金はあるはずも無く、まともなのは片手棍だけ。後はガツチガチの初期装備だ。

幾ら女性プレイヤーが少ないこのゲームとは言え、背中を預ける仲間こんな弱そうなプレイヤーを選ぶ人など居る訳もなく……

「はあ……誰も来ない……」

リズは空腹を訴える腹を抑えながら近くのベンチに座る。

「死因餓死とか嫌だなあ……よつと」

リズは再び立ち上がり、誰かパーティを組んでくれと叫ぶ。
すると……

「ふむ……大きさは……普通かな？」

「うっひゃあっ!!？」

後ろから急に胸を揉まれた。本当に急にだ。

だが、ハラスメントコードに抵触してる表示も出ない。そして、男にしては高すぎる声。間違いなく女だ。

「な、何すんのよ!!？」

「効かぬ！」

振り向きざまにビンタをかますが、後ろの少女は見えた限りでは、その場で飛び、空中でバク転するかのよう距離を取った。

が、さらにリズが片手棍をぶん投げる。しかし、圏内のため、少女の目の前に現れた壁に弾かれる。

「ふっふーん。結構体動くんだね、このゲーム。」

「パーティメンバーは募集してもセクハラは受け付けてないわよ！」

「まあまあ。」

目の前の少女は紺色の長い髪をストレートに伸ばし、赤色のバンダナを巻いている。

「君もお金ないんでしょ？ボクも髪の毛を伸ばすアイテムとこのバンダナ買ったら初期資金尽きちゃってさ。」

あははと笑う少女を前にリズは呆れた。まさかそんなことに貴重な10000コルを使うとは……と。

だが、少し考えると少女の言葉がおかしいのに気付く。

「……え？つまりあんた……一ヶ月間も何も食わなかったの!？」

「そんなわけ無いじゃん。さつき来たばかりなんだよ」

「さつき……う……も、もしかしてアンタ、このデスゲームが始まってからログインした訳!？」

「そだけど？」

リズは呆れ半分怒り半分。もう、何を言っているのか分からなくなった。

「実はボク、リアルだとあと数ヶ月生きれるか分からないくらいの病

気持ちってるんだよね……だから、主治医の人に頼んで最後までいい派手に自分の生きた記録を残したいって思ってた。だからそんな怒らないでよYOU」

別に怒ってなんて……と言いたかったが、自分の表情を触って確認すると、確かに怒り半分呆れ半分な顔だった。

「……そうだったの。怒ってごめんさい」

「普通は怒られる事だから別にいいよ。怒られるのなんて分かりきってたし」

あはははくと笑う少女だが、余命数ヶ月で何か苦しいことでもあったのだろうと思うと、こういうところで体を動かし、うんと楽しみたいと思うのも全然間違ってる事ではないと考えられた。

「それじゃあ……パーティ組んでくれる？えつと……」

そういえば名前聞いてなかったな。と思い、なんて呼べばいいか考えていると、少女は悟ったのか、自己紹介をしてきた。

「ボクはユウキ。よろしく」

「私は里香……じゃなくてリズベツト。よろしく、ユウキ」

自分のメニューを開き、パーティ申請を送ると、ユウキはすぐに承認した。

ユウキはすぐに自分のメニューを開くと、リズにフレンド申請をしてきた。

「別にいいよね？」

「ええ、全然」

承認ボタンを押し、ユウキをフレンドとして登録する。

ふと左上を目だけ動かして見ると、自分のHPゲージの下にY u k iという名前とHPゲージを確認することができた。

「それじゃあ、一層のフィールドへ行こっか」

「ええ。はやいところ稼いで帰ってきましょう」

この時、リズはまさか目の前の少女がキチガイだとは思ってもいなかったのである……

「ビヤツハツハー!!楽しい!楽しいよリズ!!」

「お、おう……」

フィールドへ出た瞬間、ユウキは豹変した。

容姿は全然いいのに、もう女としてはしてはいけない表情で嬉々としてモンスター解体へと走っていった。

そう、文字通り解体である。

「目だア!耳だア!鼻ア!!血が出ないのが残念だけでもう体を動かすのが楽しすぎてイっちゃいそうだよアハハハハハハ!!」

最早サイコパスの粹だが、その他の行動から考えると彼女はキチガイとしか言い様がないだろう。

リズは何もしなくても上がっていく自分のレベルとHPを見てこの行動は本当に正解だったのかと困惑した。

「あー楽しい!もつと!もつと斬らせてよキヒヒヒヒヒヒ!」

これが現実なら今頃ユウキは全身真っ赤だっただろう。

「……あれ?もう居なくなっちゃった。それじゃ、迷宮に行こつか」

ユウキは僅か数分で辺り一帯の敵を狩りつくしていた。

レベルは五に上がり、リズは片手棍を使うつもりなので、筋力値を中心にステータスを上げた。

「……は?ちよ、ちよつと……」

ステータスを上げていたリズはステータス画面を閉じ、ユウキに手を伸ばす。が、

「ビヤツハー!!」

キチガイは止まらない。ステータス上げるのも忘れて走り出した。

そしてリズもなんとかユウキの後を追い、迷宮へと飛び込んだ。

「目に剣突き刺された気分ってどうなのかなあ?どう?痛い?痛いよねえ……ヒヒヒヒヒヒ!」

そこには、ユウキがコボルトを押し倒して馬乗りし、剣を目に突き刺している地獄絵図が浮かんでいた。

この狂人、何でもありである。

「このままゆつくりと下に……あ、死んじやった」

この狂人、殺人を楽しんでやがると戦慄するリズ。

「あ、リズ！ここボスだよ！ちよつと戦つてくる！」

「あ、はいは……はあ!!？」

ちよつと待て！なんていきなりボスに挑みに行くんだとツツコミたくなるが、キチガイはボスの間へと入った。

慌ててリズがそれを追いかけると……

「喉切り裂いてく、そのまま腹をぐ開帳く……あれ？赤くなるだけ？まあいいや。じゃあ目と鼻潰して……あ、そうだ。耳から逆の耳に……よし、通った！いやく、生命のし……」

リズは全速力で迷宮を後にした。

そして迷宮の外で貰い物の片手棍で敵を時々ソードスキルを試しつつ倒すこと二時間。レベルは10まで上がった。上がってしまった。一体迷宮でどんな虐殺が行われてるのか気になったが、見に行きたくはなかった。

「いやく、満足したよく。やっぱり体動かすのは楽しいねく」

と、迷宮から出てきたユウキはそのままリズの胸を揉んだ。

「やっぱりおっぱい大きいの羨まし……」

「吹っ飛ベキチガイ！」

リズはユウキを引っぺがし片手棍を一閃。ユウキを殴り飛ばした。

「あばっ!？」

「……鍛冶士でもして安定にお金稼ぐ……」

リズがマスターミスになった理由は、もうキチガイとフィールドに行きたくないという案外しようもない事が理由だった。

「つと。そんな訳で攻略組に追いつけそうなレベルになった訳だけど……ってありや、寝ちゃったか」

思わず話し込んでしまい、気付いた時にはユイとストレアは眠ってしまった。

「……いい夢見なさいよ」

AIが夢を見るのかは分からなかったが、リズはそう声をかける
と、自分も目を閉じ、眠りについた。
せめて、明日はキチガイと関わることはないようにと。

キチガイが暴れるかと思つたらニンジャが暴れた件。
byリズベツト

ズルズルと麺を啜る音が店に二つ、響く。

音源の一つは白と赤の甲冑に身を包んだ少し老けた男。もう一人は赤と白のエプロンドレスに身を包んだピンク髪の少女。

「うむ……あまり美味しくはないな……」

「もうちよつと醤油の味が再現されないと醤油ラーメンとは言えないわね……」

そう、我らが苦労人、リズベツトことリズと、全ての元凶、茅場晶彦ことヒースクリフだ。

この日はユイをシノンに預け、ストレアをフィールドにほっぽり出して、ヒースクリフから連絡のあつたラーメン屋で待ち合わせてラーメンを食べに来たのだ。

が、現実世界のラーメンとは程遠いラーメンしかこの仮想現実にはないので、ラーメン好きなのにそこら辺をカーディナルに任せたヒースクリフと現実が恋しいリズベツトは微妙な顔でラーメンを啜っている。

「やはりラーメンだけは全力でプログラミングしておくべきだったか……」

「それやったら何でそこを重点的にプログラミングしたのかと呆れられるわよ」

既に麺を食べ終え、スープを飲み干したヒースクリフは両肘を机について溜め息をついている。そんなヒースクリフを見てリズは呆れた顔をしてズルズルと麺を口に入れていく。

「そういえば、最近キチガイ達はどうか？私の店では暴れまくってるわよ」

「こつちもフィールドで暴れまくってるさ。彼等はやはり頭のネジを産まれた時から殆ど欠損させていたらしい」

「あんたも十分欠損させてるわよ」

「そんなキチガイを相手にしている君もキチガイだ」

「うえっ、マジ？知らない内にキチガイの思考になっちゃったのかなあ……」

そんなこんな話している内にリズはラーメンを食べ終わり、ふう。と一息ついて水を飲んだ。

「そうだ。重要な事を忘れていた」

「重要な事？」

「明日、笑う棺桶討伐作戦を行うから、リズベツト君に剣と盾の整備をしてもらおうと思っていたんだ」

「へえ……ラフコフねえ……って、はあ!!？」

サラツと重要な事を言ったヒースクリフ。だが、言った本人は特に何も思っていないらしい

「二応、あのソロのキチガイ達と血盟騎士団、それと聖竜連合と勇士数名での戦いになっている」

「ディアベル達も？」

「この事を話したら快く了承してくれた。ラフコフは全プレイヤーの敵とも言えるからね」

ちなみに、ラフコフはこの時点でユニークスキル持ちが少なくとも三人（内二人はキチガイ）、そして鬼神に辻斬り、さらにはあの狂人まで相手にしなくてはいけないという事になっている。逃げて、超逃げて。

「あと、何故かストレアまでがこの話を聞いたらしくてアスナ君からストレアも戦わせるようにと言われたよ」

「ヒースクリフ？ストレアに何かあつたらその頭力チ割るから」

一瞬でリズがどこからか片手棍を取り出す。しかも、ヤケにゴツイ形をしている。

「ま、まあ彼女の安全は確保しよう。と、言うかキチガイが暴走するから大丈夫だ。作戦はキチガイを前面に、逸般人を中間に、残りは後ろにだ」

そんなリズを見て感じない筈の寒気を感じた。

「逸般人もキチガイに入ると思うんだけどなあ……」

「君ももう逸般人だよ……」

ヒースクリフの言葉は聞こえず、ただズルズルと麵をすすする音だけがラーメン屋に響いた。

「野郎共オ!!その股間についている粗末な『バキューン』を潰されたり捻じ切られたり使う前に機能停止させられたく無かったら死ぬ気で戦えエ!!つてか私のタメに死ぬツ!!私が生きるために盾になりやがれ!いいなアツ!!」

『サー、イエツサー!!』

「アア!?だれが男だゴルア!!」

『イエスマム!!』

「それでいいんだよ、それで!」

ラフィンコフィンがアジトにしてるらしき洞窟の真ん前でそんな恐喝にも似た作戦が血盟騎士団に伝えられた。そして女として言っているのかどうなのか分からない言葉を叫んだのはご存知の通り、我等が鬼神、アスナである。いや、デスナである。

そして返事をしたのは勿論血盟騎士団の皆さん。最早この恐喝はいつも通りで、一部の人間は恍惚の表情を浮かべている。誰か病院を連れてこい。精神病院を。

そして他の方では。

「そ、その……私は戦えませんが……あの、死なないように頑張ってくださいね!」

『ウオオオオオオオオオオオオ!!』

「……………ふっ、ちよろい」

こんなもう詐欺にしか見えない応援を送ったのは中層のアイドル（とは名ばかりの攻略組顔負けのレベルを持ったキチガイ）であるシリカだ。恥ずかしがるようにソロプレイヤー及び聖竜連合及び少数ギルドの皆さんの前から立ち去った後、シリカはゲスイ笑みを浮かべて横の方で待機しているエギルの後ろに隠れてそんな事を呟いた。

エギルは今回、シリカの護衛として雇われたという体で来ている。

「詐欺師みたいだな、お前」

「馬鹿な男からは筆れるだけ筆り取ればいいんですよ。髪の毛の先からケ○毛の先まで筆り取って後はポイです」

「詐欺師に失礼だった。お前は悪魔だ」

誰かこの子を精神病院に隔離して性格を直してください。

何故、シリカがこんな所まで来たかという点、勿論アイテムを貢がせるためだ。しかも、ラフィンコフィンが持っている結構強力な武器や防具の数々を。

今回の作戦は奪ったラフコフメンバーの装備はその人の物に出来るため、奪ったはいいが使えない武器を貢がせてそれを金に変えようという魂胆だ。そんなシリカの1番の狙いはラフコフリーダー、P O Hの持っている短剣、メイトチョッパ。これさえあれば暫くは武器を変えずに済むだろうし、使えなくなった所でリズに引き渡してインゴットに変え、作り直したら強力な武器になるかもしれない。既にキリト達ソロキチガイ同盟とアスナ、ヒースクリフ、クライン、風林火山メンバー、ディアベル他聖竜連合幹部組には話を通してメイトチョッパを奪えたら格安で融通してもらおう事になっている。

「くふふふ……」

「こいつ、現実でも同じ事をやってるんじゃない……」

「やっめますよお？すっごく楽しくてやめられなくて」

「地獄に落ちろ悪魔っ子」

「閻魔様の物筆り取るのも面白そうですね」

「その発想はなかった」

そして一方、ソロキチガイ同盟こと、キリト、リーファ、シノン、ユウキ、ストレアは。

「お兄ちゃんお兄ちゃん早く行きたい早く斬りたい」

「まあ待て妹よ。俺より先に行くな。俺が斬る。俺が斬ヒヤツハアアアアアアア!!」

「はいはい、落ち着けキチガイ」

「ぐえっ」

「あ、落つことしたエリユシデータもーらいつと」

「返せキチガイ！それかお前のマクアファイテルと交換だ！」

「おらよ!!」

「誰が投げて渡せと言った貧乳男女ア!!」

「胸か!?お前の判断基準は胸かススワタリ!!」

「だあれがススワタリだ貧乳腐女子チビロリボ!!」

「これでも胸は結構あるし声はボーイツシュでちっちゃくて腐女子でロリボなのはどっちかと言ったら中の人だトトロの付属品!!」

「お前まっくろくろすけナメてんじゃねえぞ!!あれでもちゃんと働いてるし老若男女どの世代からも人気な超国民的アイドルだぞ!!単体でも人気なまっくろくろすけをトトロの付属品とか言ってるじゃねえぞゴルア!!」

「そこまでまっくろくろすけについて熱弁できるキリト気持ち悪っ!!」

「誰がヒキオタキモニートだア!!その通りです!!」

「あーあ、だあめだこりゃ」

「わー、みんな楽しそー」

「ストレア、早急に眼科に行きなさい……ってリーファ確保オ!!」

「うげっ!?弓の弦が首にイ!!?」

あーもう滅茶苦茶だよ。

「はあ……これで強いから困る」

ヒースクリフは胃薬を飲んでいた。

ラフコフメンバーはアジトの中で武器を構え、ニヤニヤと気味悪い笑みを浮かべていた。理由は簡単。今日この日、アジトに襲撃をかけてくる攻略組の面々を殺せるからだ。

既にメンバーの中でも隠密に優れた者が偵察に行つて情報を持って帰ってきた。既に奴等は目の先鼻の先。奇襲したつもりが奇襲されて驚き悲鳴を上げ無様に死んでいく様を思い浮かべると笑いが止

まらない。

「くひひひ……楽しみだなア……」

「ほう、何がだ？」

声は、自分の上から聞こえた。

「何がって……攻略組の奴等を殺す事……」

「そうか。ならば、ラフコフ殺すべし!!」

「あ?」

その瞬間、そのラフコフメンバーの首にサクツと何かが刺さった。

そう、視聴者の方ならご存知だろう。スリケンだ。

「イヤーツ!!」

その瞬間、ラフコフメンバーの頭が上から降ってきた何者かに蹴り飛ばされた!

「グワーツ!!」

ラフコフメンバーは勢いよく吹っ飛び洞窟の壁に激突!

「な、何だ!!?何者だ!!?」

先手を打った者がその声に答えるようにラフコフメンバー達の前に姿を現す。

「ドーモ、ラフィンコフィンⅡサン……ニンジャです」

見よ!我等が殺伐者のエントリーだ!その服はまさに全身に返り血を浴びたようなアトモスファイアを醸し出し、その口元を覆うマスクには忍殺の二文字が刻まれている!

「に、忍者だあ!?!」

「ラフコフ殺すべし!慈悲はない!!」

「アイエツ!?!」

「イヤーツ!!」

ニンジャの強烈なる飛び蹴りがラフコフメンバーの一人に突き刺さる!

「アバーツ!!?」

「イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!」

「グワーツ!!グワーツ!!グワーツ!!」

ゴウランガ、何たるワザマエか!吹き飛んだラフコフメンバーにマ

シンガンのように何個ものスリケンが突き刺さり、追い打ちをかける！かのミヤモト・マサシならこの状況でもスリケンを全て弾いてみせただろう！

「イイイイイイヤアアアアアアア!!」

そして立ち上がろうとした最初に吹き飛ばされたラフコフメンバーの一人を掴んで飛び上がる！あ、あれは！暗黒カラテ技の一つ、ヘルホイール・クルマだ!!

「グワーツ!!サヨナラ!!」

ワザマエツ!!ラフコフメンバーの一人は哀れ爆発四散!!

「な、何だアイツ!?ほ、本当にニンジャなのか!?ええい、殺せ!!全員でかかれば仕留めれる!!」

「無駄な事よ!!イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!イヤーツ!!」

『グワーツ!!』

ニンジャは何個ものスリケンを一気に投げ放つ!!なんとというワザマエか。その全てのスリケンはラフコフメンバーの喉に寸分の狂いもなく突き刺さった!コワイ!!

「ニンジャが先に行つてやがったか!オイ野郎共!!ニンジャに手柄取られてんじゃねえぞ!!」

『オーツ!!』

その時、攻略組の面々が到着した。人数的には互角だが、こちらにはキチガイとニンジャがいる。ラフコフに勝ち目はない。実際コワイ!

そしてシノンはいつも通り弓で肉弾戦をしている。これが弓の正しい使い方、そして正しい戦い方、YQCなのだ。

「えっと……なんで私は目を塞がれてるのー?」

『見なくていい!君はそのままの君でいてくれ!!』

と、大事にされているのはストレア。青龍連合に所属している女性の人に目を塞がれ、そんな彼女達を聖龍連合のほぼ全員が守って戦っている。流星にこんな阿鼻叫喚地獄絵図を彼女に見せるわけにはいかないと思ったからだ。既に、彼女の純粹さに心を奪われている男も実は何人かいる。

「……クライン君。ここにマトモな人間はいないようだね」

「そうだな、ヒースクリフ……お前ん所の血盟騎士団も手遅れ気味だしな……」

「どうしてこうなった……」

「風林火山位が丁度いいんだよ。みんなを纏めれるしキチガイに毒される事も無い」

「私は小説や漫画のような騎士団を目指しただけなのだが……」

そしてこっちはこの中で比較的まともな部類に入るかもしれないヒースクリフとSAOの良心、兄貴、オトンとかいろいろ言われているクラインが真面目に戦っている。クラインは一度シリカに目をつけられた事もあるが、自力で回避した数少ない一人とも言える。彼はモテない事をよく嘆いているが、どっちかと言ったら男に慕われる兄貴肌なのであって、実は下層の方に隠れファンがいたりいなかったり。

「リーファ!どっちが多く斬れたか競争だア!!」

「うぎゃあ!!」

「最ツ高に面白い提案だねお兄ちゃん!!」

「ひぎい!!」

「それ僕も混ぜてよ!競いようが無かったらつまらないじゃん!!」

「ドゴオツ!!」

そして断トツでキチガイな三人はおつそろしい提案をしてその提案に乗っている。シノンは見ないふり。アスナは単騎突撃している。

ヒースクリフとクラインとディアベルも止めたら巻き込まれると目の前の敵を相手に戦っている。

そしてキチガイ三人+アスナがある程度進軍した所で、いきなりラフコフメンバーが四人の周りからいなくなった。

「あれ？居なくなっちゃった？」

「んだよつまんねえな……」

「えー……もつと殺したーい」

「まだまだ居ンのは知ってたんだよ!!出てきやがれゴルア!!」

上からリーファ、キリト、ユウキ、アスナである。もうこいつらラフコフを蹂躪する気満々である。

周りにラフコフメンバーが居なくなったため、全員が舌打ちしながら後ろの方にまだ居るのであろうラフコフメンバーの蹂躪に向かおうとした瞬間、さらに奥の方からナイフが四つ飛んできた。

『甘い!!』

が、勿論それがこのキチガイ共に当たる訳もなく、ナイフは剣に弾かれて明後日の方向に飛んでいった。

「あれえ？弾かれた？」

ナイフが飛んできた方から声が聞こえた。そして、足音は三つ。

その瞬間、キチガイ四人は笑った。大物だと。

「まつ、いいや。リーダー！早く殺りましょうよ!!」

「落ち着け。獲物は逃げねえよ」

出てきたのは、目の部分に穴を開けたズタ袋を被った男、ジョニー・ブラック。そして、目の部分が赤く発光しているマスクをつけた赤目のザザ、そして膝上まで包む黒塗りのポンチョを着た男、POH。「あの黒のキチガイ剣士様にそのキチ妹……そんなもって狂剣に鬼神のアスナ……まだまだガキじゃ……」

『誰がキチガイだ快樂殺人者アアア!!』

まだPOHが何か言ってるのにキチガイ四人が斬りかかった。と、言うか斬りかかっていた。気づいた時にはジョニーブラックとザザの間にいたPOHが吹っ飛んで、そこには剣を振り抜いたキチガイ四人が立っていた。

「グダグダな前振りなんか要らねえ……皆殺しだアアアアアアアアアア!!」

『ヒヤッハアアアアアアアアアア!!』

「ど、どつちが快樂殺人者だ!」

アスナの叫びに応じたキチガイ達に正論を言いつつもジョニーブラックはダガーを構えてキチガイ達から離れ、ザザもエストックを構えて下がる。

「アスナ、ユウキ! ジョニーブラックはくれてやる!!」

「お兄ちゃん! 早く! 早く斬りたい!!」

「許可してやるぜキリトにリーファ! 殺っちまいなア!!」

「四人に勝てるわけないってね!!」

そして蹂躪が始まる。

アスナとユウキの方は、ジョニーブラックのダガーが全然通らない。しかも二人はジョニーブラックを囲むように立って逃げようとしてもどつちかが剣で串刺しにして逃がさない。

「ちよつ、本当に死んじまう!」

『知った事じゃねえんたよオオオオ!!』

ダガーを当てようとしても全然当たらない。折角の毒が付与されたダガーでも当たらなければ意味が無い。

「ユウキイ! 抑えろオ!!」

「イエスマム!!」

そしてユウキの剣がジョニーブラックの腹に突き刺さり、ジョニーブラックを固定する。

「ぐえっ!?! ちよ、ちよつとやめ……」

「鉄エエエエエエエツツ拳!! 制サアアアアアアアアアアアイ!!」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そして鉄拳制裁により、腹筋崩壊(物理)をさせられジョニーブラックは後ろの方にいる味方達の方へと吹っ飛んでいった。

そしてザザの方は……

「アッハッハッハッハッ!! 楽しい!! 楽しいよオ!!」

「踊れ踊れエ!! 血イ撒き散らして踊りやがれエ!! あー楽しい!! 楽し過

「食う寝る遊ぶの三連コンボしながら現実だともう発売してるであろうSAOの後続ゲームで犯罪にならない空間で人を斬りたいんだよオ!!」

『快樂殺人者と一緒にしてんじゃねえぞゴルア!!』

全員が左手の中指を立てて青筋を額に浮かべ、女性は女としてそれはどうなの?と言えるような表情を浮かべ、キリトは一般人が見たら卒倒する顔を浮かべて剣を振りかぶった。

『死にやがれエエエエエ!!』

「さつきまで言ってた事と今言ってることの違いはなんだテメエ等!!」

「ラフコフ殺すべし!!慈悲はないツ!!」

『イヤーーーーーッ!!』

いつの間にか加わったニンジャまでもがキチガイ共と共にPOHへと斬りかかり……………

「それでPOHはフルボッコにされてラフコフは皆監獄送り……………って事?」

「はい。お陰で私もメイトチョッパーを手に入れる事が出来ましたし、アイテムを貢がせる事にも成功したので万々歳です」

シリカから聞いた事の顛末を聞き、思わず額に手を当てるリズ。その後、無事にラフコフは壊滅。ニンジャは何処かへ消え、キチガイ共は勝利のソードダンスをしていたという。もうメチャクチャでドコからツツコミを入れたらいいか分からなかった。っていうかニンジャって何だ、ニンジャって。

「はあ……………はい、メイトチョッパー。完全に仕上げておいたわよ」

「ありがとうございます、リズさん!」

ロリっ子が笑顔で肉斬り包丁を受け取り、腰に装備する様は中々顔が引き攣る後継だった。ピナも何故かリズの頭の上でムフーツと息を吐いている。

「つてか、何でアンタは外に居たのに中の事を知ってるのよ」

「そりゃあダンボール被ってチョロチョロしてましたから」

「スネークかよ……」

また額に手を当てるリズ。最早何も言うまい。

「それじゃあ、私はこれで。ピナ、行くよ」

「きゅいきゅーい」

「あー……またのご来店をー」

投げやりにシリカを見送ると、溜め息をついてカウンターに体を預ける。これはまたヒースクリフからの愚痴をラーメン屋で聞くことになるのかなあと。

その時、カランカラン。と入り口のベルが鳴った。

「いらっしやー………あっ！クラインにエギル！それにシノンにディアベルとユイちゃん！」

「よっす！リズちゃん。約束通り来たぜ！」

「よっ、久しぶりだな、リズベツト」

「皆とそこでバツタリ会っちゃってね」

「すごい偶然だったよ」

「はいー！」

入ってきたのはクラインにエギル、そしてシノンとディアベルとユイ。SAOでのリズの交友関係の中ではかなりマトモな人達が揃った。

「あれ？私が最後？」

と、今度はストレアが工房の方から出てきた。裏口から入ってきたらしい。

「みたいね。そんじゃ、パーっとやりましょうか！」

リズは急いで入り口の掛札をOPENからCLOSEにひっくり返すと戻ってきてちよちよいと部屋の中の内装を変え、椅子とテーブルを並べた。

「ラフコフ戦の祝勝会!!」

そして、全員が持ってきた食材やら料理やらをテーブルの上に並べる。

酒やジュース、ケーキや肉、それにS級食材までもがあった。

「じゃ、エギルにシノンにユイちゃん。料理手伝ってね。他の人はここで待つてること！いいわね！」

リズは笑顔でそう言うと、食材を持ってエギル、シノン、ユイと共にキッチンへと向かった。パーティーはこれからだ。

「後始末が終わらない……」

ヒースクリフは血盟騎士団の本部で書類仕事してましたとき。